

Wave

美術館だより
vol.33
NOV 9 2022



藤井浩祐 《爪を切る女》 1927年

特集

街中で 気になる建物とか

インタビュー

現代美術家・阪田清子さん



美術館の周辺には、味わい深い街並みが広がっています…それは、さまざまな時代につくられた建物たちによって生み出されたもの。本号では、その風景のなかから、学芸員たちが何か気になる建物(とか!?)をご紹介します!ぜひみつけてみてくださいね♪

エスカイア西堀富士館

新潟市美術館から最寄りのバス停「西堀通八番町」へと向かう途中に見える商業ビル。「富士館」という名前の通り、道路側の壁面には富士山の絵が描かれています。この富士山はタイルによるモザイクアートです。ビルの側面は無機質な灰色のコンクリートでできており、色鮮やかな富士山とのコントラストに目を奪われます! 建物の1階は温かみのあるレンガ調になっており、カフェやバーが軒を連ねています。こちらもレトロな雰囲気があり、素敵です。美術館からの帰り道、バスの待ち時間にふらっと立ち寄りてみてはいかがでしょうか。

(学芸員 岡村 秀美)

西海岸公園の陸橋

美術館の裏手から海に向かうと、広大な西海岸公園が広がっています。明治の頃に正午の時報を告げた大砲があったことからその名のあるドン山をはじめ、彫刻に石碑など、見どころも点在する場所ですが、気になっているのはこの陸橋。海岸道路からこの公園にアクセスする、歩道橋を兼ねた遊歩道ですが、見通しの悪い松林をうねうね続くその姿はアート作品のようにも見えます。そういえばかれこれ10年前、日比野克彦さんと美術館の近所でワークショップをしたことがありました。アップダウンの多いこの地区のそこかしこに存在する階段がテーマだったのですが、どこかとどこかを繋ぐ、こういう橋に惹かれるのはいまだにそのせいなのかもしれません。こんな景色を見ていると、また何か企みたくてしまうのです。

(学芸員 荒井 直美)



西堀ROSA

古町のバス停から美術館に向かって西堀通りを歩いていると、地下街への入り口がいくつかあることに気づきます。地下街というと駅と隣接しているイメージがありますが、70年代、西堀地下駐車場の建設に合わせてこの地下街がつくられたのだとか。中心部にあるのは半円アーチに囲まれた「出逢いの広場」。天井には薔薇柄のタイルがあしらわれ、壁には薔薇の照明がつたうなど、ROSAの名に恥じぬゴージャスな空間が広がります。入り口はたくさんあるけども、ぜひNEXT21のエレベーターで降りて来て下さい。目の前に立派な柱が現れますが、その天井の蛍光灯の配置がアツい。＼ROSA／からビームが発射されているのではないですか。情熱的な薔薇空間とは異なる近未来な感じ。そのギャップ、嫌いじゃないです。

(学芸員 児矢野 あゆみ)



旧吉野活版所

美術館から歩いて5分ほど、昔ながらの商店街の中にある、ちょっと不思議な建物です。一見鉄筋コンクリートのようにもみえますが、1916年に建てられた木造建築なのだろう。外壁をモルタルで塗装して西洋風に仕上げています。正面には古代神殿を思わせる、頭に渦巻き状の飾りをもつ円柱が2本並び、「吉野オフセット印刷所」「吉野活版石版印刷所」と、建物の歴史を伝える文字がうっすらと見えます。中央上部や両脇にみえる、麦の穂や果実をモチーフにしたレリーフも特徴的です。中には新潟初のエレベーターもあるのだとか。気になった方は、現在1階に入っている自家焙煎珈琲の販売所兼印刷ギャラリーにもお立ち寄りを。中はエキセントリックです。

(学芸員 菅沼 楓)

新潟縣信用組合本店



いかにも金融機関らしい堅固な建物という印象ですが、繊細な工夫が見えてきます。上階の大きな直方体は稜線が斜めに面取りされて、柔らかい陰影を与えています。連続する縦長の窓が整然と並び直線もきれいです。正面の外壁はみかげ石で、叩いて(おそらく)荒く仕上げられ、重厚な印象ですが、長方形の上辺だけ磨かれ、少し光るので横のストライプがうっすらと見えます。キャッシュコーナーの上にある斜めの円筒形も見逃せません。なお室内の壁面にある抽象的なレリーフの作者は、大平隆洋という彫刻家だそうです。詳細を尋ねたら、竣工は1971年6月、設計は石本建築事務所と聞き、納得。創設者の石本喜久治の精神が生きているのでしょうか。

(館長 前山 裕司)

新潟駅万代口バスターミナル

最近では珍しい、^{とうたん}頭端式という形式のバス乗り場で、どのバスも後進で入ってきます。各番線を覆う幅50メートルの大屋根はカンチレバー（片持ち構造）で支えられ、鋼材の組み合わせで庇の先を薄く、柱の根元を細く引き締めています。ジャン・プルーヴェの家具も思わせる、鋭く力強い造形にシビれるのです。それは、新潟駅旧駅舎（1963年増築竣工、2022年解体）の、白く輝くモダニズム建築と響き合っていたことでしょう。バス乗り場が新駅舎の高架下に移動したら、この古いランドマークは失われます。大屋根の下をせわしなく移動しては、警笛でバスを誘導し、名調子で到着をアナウンスする、案内員の皆さんの職人芸も、まもなく見納めです。

（学芸員 藤井 素彦）



▲《愛》作者不詳、1966（昭和41）年「白山会」贈。「白山会」は白山小学校教員の同人会で、資金集めから完成品の輸送まで尽力されたそうです。



《和》第41回卒業生記念制作、1974（昭和49）年。

新潟市立白山小学校のセメント彫刻

昭和大橋のたもと、白山小学校の正門を入ると彫刻2点が迎えてくれます。《愛》は、新潟地震（1964年）の被害で校舎を立て替えたのを機に、「これからも子どもたちを守って育んでいこう」との決意を込めて、1966年に設置されました。その思いの通り、青年はやさしく後押しするかのように少年の肩に手を添え、ともに前方を見つめています。側面から鑑賞すると、少年が背伸び気味、青年はゆったりと構えている様子もわかります。一方の《和》は、詳しい経緯は不明ですが、銘板から、卒業を控えた6年生が共同制作したものと思われます。手前の人物の視線が後ろの2人の指先へと繋がり、伸びやかさが生まれています。友だち同士でモデルを務めている様子を想像すると、なんだか和む作品です。（学芸員 上池 仁子）

表紙 | 作品と作家③

《爪を切る女》1927年

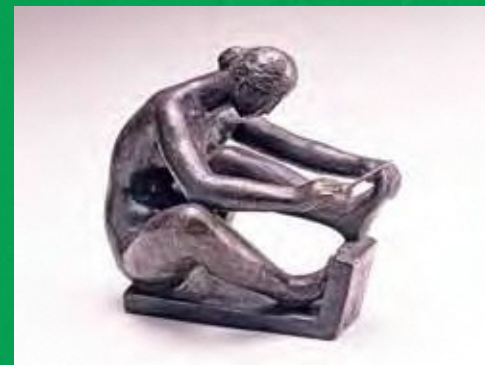
藤井浩祐 ふじいこうゆう（1882-1958）

ブロンズ 高さ15.3×幅10.1×奥行13.0cm

藤井浩祐は、1916年に日本美術院同人となり、平櫛田中や石井鶴三に優る指導者格と目されました。『ジャパニーズ・ヴィーナス 彫刻家藤井浩祐の世界』図録（井原市立田中美術館・小平市立平櫛田中彫刻美術館、2014年）によれば、藤井の院展出品作は意外にも3点の現存が確認されるのみ。《背を拭く女》（再興第13回院展）とこの作品（同第14回展）との2点が、当館の収蔵品です。

市内に伝わる院展の彫刻としては、中原悌二郎の生前鑄造作《若きカフカス人》（1919年、再興第6回院展、新潟大学蔵）もあります。それとは対照的に、藤井作品には強い正面性や主題性は認められません。花瓶や灰皿なども手掛けた藤井は、院展では小品数点を組み合わせて出品するという、奇妙な試みを繰り返していました。

この作品は「飾る」と「使う」が繋がるかのような愛らしさで、まるでブックエンドのようにも見えます。東京美術学校で同級だった朝倉文夫に対抗心を隠さな



かった藤井には、そもそも「偉大」な彫刻芸術への反発もあったのか。彼の小品は、置物や人形は彫刻と何が違うのか、というような根底的な問い、あるいは肩透かしだったのかもしれない。

そんな藤井浩祐に倣って、脱力系の余談も一つ。この作品が前述の回顧展に出品された時、先方の担当は小平の藤井明さん、当館が筆者。藤井が藤井作品を藤井さんにお貸ししたわけで、お互い藤井藤井連呼したやりとりを、今も愉快地思い出します。

（学芸員 藤井 素彦）

学芸員のハマリごと

美術館学芸員の日常は、割と過酷です。私にとって、その疲れを劇的に癒す手段は、ずばりサウナ。ご近所から出張先の名物施設まで巡るなかで、特に美術好きにおすすめしたいのが、新潟駅南の銭湯「みどり湯」です。

こちらのサウナはミスト式で、パンチのある熱気が天井から足元まで循環し、身体の芯から温まります。水風呂の代わりに冷水専用シャワーがあり、頭からかぶり放題なのも最高。そして何よりも、浴室を彩る壁画が圧巻なのです。約1センチ角のタイル（何万枚?!）のグラデーションで、富士山や松林、熱帯魚などが描かれた様子は、伊藤若冲あるいは新印象派絵画を思わせます。愛らしい円形の湯船で、いろんな角度から鑑賞していると、高貴な気分になります。

（学芸員 上池 仁子）



女湯の様子。サウナ室は男女湯とも桃色タイル貼りです。



円柱部分の職人技にも惚れ惚れします。

編集後記

当館の前川國男建築を紹介する機会は度々ありますが、今回は美術館を飛び出し、周りの気になる建物（とか）について特集しました。普段は何となく通り過ぎてしまうおなじみのあの場所も、少し立ち止まって見てみると、おもしろい発見があるかもしれません。本号が新潟市内の建物巡りのヒントとなれば幸いです。これからは美術館の中だけでなく、地域に「あるもの」にも目を向け、スポットを当てていきたいと思います。

（学芸員 菅沼 楓）

阪田 清子

過去と現在の循環



「不確かな立ち位置の集合体」をテーマに、日用品や自然物を素材として用いたインスタレーション作品を発表し続けてきた美術家・阪田清子さん。1972年新潟県上越市に生まれ、大学進学を機に沖縄県へ移住、現在も同地を拠点に制作活動をされています。当館企画展「新潟映像祭」(11月1日～23日)で上映する映像作品《対岸について》(2016年、当館蔵)を起点に、作品への思いや沖縄での暮らしについてお話を伺いました。

2022年9月10日 ZOOMでのオンラインインタビュー 聞き手・編集：菅沼楓、荒井直美(新潟市美術館学芸員)

撮影：中村脩 《Landscape—水の緒》の前で 水と土の芸術祭2018 ゆいぽーと(新潟市芸術創造村・国際青少年センター)にて

——《対岸について》はどのような経緯で制作されたのでしょうか。

金時鐘^{キムシヨウ}さんの『長篇詩集 新潟』¹をモチーフにして制作しました。砂丘館での展示²が最初ですね。その時は《対岸について》のほかに、その詩集を題材として《ゆきかよう舟》と《うみべの風景》のあわせて三つの作品を作りました。

新潟は日本海がとても身近で、自分にとっても馴染みのある場所です。日本海の海岸線を歩いていると、春先には本当に様々な漂流物が流れ着くんですね。その漂流物の中には、日本語ではないものも混ざっていて、それらの出先とはいったいどこなのか。今自分が立っている日本や新潟の対岸という場所を想像してみるところから制作がスタートしました。

——『長篇詩集 新潟』とは、展示に向けての制作の中で出会ったのでしょうか。

初めは『原野の詩 集成詩集 1955』、1988『(立風書房、1991年)』という、詩が収められている本の一部としてみていたので、特に意識していなかったんですね。そんな中、たまたま韓国の友人から『新潟』のことを教えてもらって、改めて調べ直した時にはじめて独立した詩集として意識が向くようになってきました。……漂流物には以前から興

味があったのですが、『新潟』にもう一度出会った時に、漂流物と詩集が結びつきました。



《対岸について》2016年

——《対岸について》では、『長篇詩集 新潟』のテキスト「文字」文字に塩の結晶を載せていくカットが続きます。この塩の結晶は「自身で作られたんですね」。

地味な作業ですが、直江津の海で海水を汲んで、煮詰めて、さらに塩の結晶を作りました。部屋に水槽のようなものをたくさん置いていたので、部屋がプチ塩田になっ

ていましたね(笑)。実は、作品のために塩の結晶作りをはじめた訳ではないんです。思い出に残っている海があって、その海をどうやって持ち帰ろうか、保管しようか考えたんですね。それが塩の結晶作りに繋がっていきました。



《ゆきかよう舟》2016年

——一粒一粒手作りの塩の結晶には、どのようなイメージが？

いろんなイメージが重なっています。海そのもののイメージや、海から派生して、生命の繋がりの。結晶が光を受けてキラキ

1. 『長篇詩集 新潟』(構造社、1970年)は、在日朝鮮人の北朝鮮への「帰還事業」が推し進められた1950年代末に構想されるも、刊行までに約11年を要した長篇叙事詩。朝鮮半島を南北に分断する北緯38度線が新潟にもかかっていることから、朝鮮で越えられなかった国境をいかに日本に越えていくか、を表現した作品。

ラとする様子から、『対岸について』では、言葉というイメージも重ねています。一文ずつ発した言葉が光の信号に変わっていつて、新たなコミュニケーションツールになっていくような。



《うみべの風景》(部分) 2016年

—— 阪田さんはこれまでも素材を集めて組み合わせて、新たな形を作っていく制作のスタイルをとり続けていますよね。

作品のコンセプトと素材がどう結びつくかは、未だにはっきりしていません。ある日突然、結びつくこともあるので、常に周りに

「せ」という曲を試聴したんです。当時は沖縄の歴史や戦争のことなど全く知らなくてですね、「なぜ沖縄を返せ」って言ってるんだらうって。自分の環境も変えたいとも思っていたので、最初は学部で4年間を過ごすつもりで沖縄に行きました。

—— そのエピソードを聞くと、金時鐘さんの詩に反応したというも繋がってきますよね。

時鐘さんの詩との出会いは偶然ではあるけど必然性もあったかなと。沖縄に行かなかったら、もしかして時鐘さんの詩も見過ごしてしまっただけかもしれない。そして時鐘さんの詩に出会ったからこそ、自分が見ていた制作への視界も改めて見つめ返して、明確になっていったんだろうと思います。

—— 沖縄での生活はそれまでの生活とギャップが大きかったのではないのでしょうか。

まずは、光の強さが全然違いましたね。不思議なんです、見える色が全て目に飛び込んでくるようで、風景が平面に見えたんです。そして、社会的なところですが、住んでみると沖縄が抱えている問題が少しずつ見えてきました。

大きな問題が、振興策と基地問題ですね。常に複雑な構造を抱えています。家族内でも、対立や衝突が起きています。簡単に基地

は素材をためてしまっています。ついつい素材を見ると家に連れて帰ってしまうんですね。鳥の羽もずっと集め続けていますね。鳩が毎日うちに来るんですよ。

—— 《対岸について》は、日本語と韓国語の2チャンネルで同時に『新潟』を読み上げていく作品ですが、ところどころ読み上げるタイミングがずれたり戻ったりするところが印象的です。

日本語の朗読は私が行い、韓国語は私の友人が朗読しています。韓国に行った時に、私が撮影しました。もちろん二つの国の言語の違いもあるのですが、塩の結晶を置いていくときに、言葉を一つ発しながら置いていくという、身体性があつたのも大きなところだと思います。私も編集作業をしている中で、二つの映像の「ずれ」を感じて、そこではじめて二つの国の複雑な関係性を意識しました。

—— 阪田さんにとって《対岸について》は初めての映像作品ですよね。表現方法として映像を選んだというのも、塩をのせていくという身体性を強調する意図があつたのでしょうか。

映像に行き着いたのは、まずは記録をとろうという意図がありました。塩の結晶にはいろんなイメージを重ねていますし、自

賛成だ、反対だっていう声を上げられない人たちもいる。戦争も含めて簡単に割り切れないような社会がずっと続いてきています。住むことで沖縄の土地も歴史もつながりで見えてきました。

—— 割り切れたらむしろ楽ですよ。けどそうじゃないから問題になっている。

声をあげられない人たちが数多くいるというのも、沖縄に来て知ったことです。自分の立ち位置、相手の立ち位置が複数あるという意識は、沖縄に来て、あるいは、新潟を離れて思ったことですね。

—— 阪田さんご自身はどのような立ち位置を意識しながら制作されているのでしょうか。

新潟と沖縄を行き来しながら自分の立ち位置も複数あるという意識はいつも持っています。例えば、新潟にいたときは大きな対立を意識することなく大多数の中にいましたが、沖縄に来ると途端に新潟出身という出自だけでも少数派になる。

ここ数年、「不確かな立ち位置の集合体」というテーマを持って制作をしているのですが、そこにもこの意識は繋がっているのかなと思います。沖縄で見た声を上げられない人々の姿は、例えば、虐殺を口外できなかった済州島の人々とも重なります。世

分が結晶を置いていく行為の中には、過去と向き合い、現在と循環させていくという意味を込めています。それを別の方法で記録できないだろうかと思って、カメラを回しはじめました。

新潟から沖縄へ

—— 阪田さんは上越市(高田)のご出身ですが、母方の家が直江津にあったことから、小さいころから海が身近であったと伺いました。

今はいろんな角度から考えられるようになりましたが、海の見え方は新潟と沖縄では違いましたね。新潟の海は漂流物のイメージがあります。しかも自分の知らない言語のもので。なので、海の先の対岸への意識がありました。一方で沖縄の海は、境界線のイメージです。海の波打ち際が境界のようであり、波によってその境界が揺れ動いていくような。

—— そもそもなぜ沖縄を進学先として選んだのでしょうか。

本当に運命的な出会いだなって今でも思うんですが、予備校生の頃、まだ進学先を決めていないときに、たまたま入ったCDショップで大工哲弘さんの「沖縄を返

界で起きているそういう軋轢の中で、語れない、どこにも属せない、という人々と繋がることのできる。沖縄で制作はしていますが、視点や立ち位置を複数持つこと、その意識があることによって、世界とも結びついていくんじゃないかと思っています。

—— それぞれが違う考えを持っていて、それが絶妙なバランスで保たれている社会に生きる、私たち自身の問題にもつながると思います。

問題がどう繋がっていくかっていうところを、アートを通じて考えたい。そうしないと、沖縄あるいは、沖縄でなくてもその地域で起こったことが、そこだけで閉じてしまう。そうすると、どこにも共有できない、共感できない。その問題をどう編みなおして、結びつけていくかというところに、アートの力が必要なのかなと思います。

■ここでも阪田さんの作品が見られます！

「コレクション展2 Sea Lane — 島々への接続」

会期：2022年11月3日(木・祝) -

2023年3月19日(日)

会場：金沢21世紀美術館展示室1・4、13

詳細は下記二次元バーコードからご確認ください



近づきやすいですか、美術館

前山裕司 新潟市美術館館長

昔々のことですが、いまだに胸にトゲが刺さっているような記憶があります。以前の職場、埼玉県立近代美術館が開館した1982年なので、ちょうど40年前の話です。外線電話に出たら、車椅子で〇〇から美術館までどのくらいかかりますか、という質問でした。勤め始めて1年半、地元ではないので、美術館のある浦和の地理に詳しくないし、まして車椅子となると想像もつきません。そのうち受話器の向こうから、この電話も人に頼んでかけてもらっています、もういいです、と切られてしまいました。

美術館にはいろいろな人が来ます。春になると平日に制服で現れる女子中学生（ひそかに春ちゃんと名付けていました）は、たいてい人の少ない場所の椅子にいました。毎日、長いソファの同じ場所に座るおじいさん。赤瀬川原平さんにこの人の話をしたら、すごく面白がってくれたことを思い出します。

おそらく展覧会も見なかったでしょうが

ら、美術館の収入には貢献してなかったでしょう。でも、こんな人たちのことを何十年たっても覚えています。それはたぶん、美術館という場所を心から必要としてくれたからだと思います。

障がいのある人のアート活動に関わる人が多いので、いろいろな用語に触れる機会があります。「ソーシャル・インクルージョン」（社会的包摂）という言葉があります。誰もが障害されることのない「共生社会」を目指す、つまり障がいのある人だけでなく、外国人、高齢者などに広がる考え方で、理念としても重要でしょう。劇場や美術館などの文化施設に直接関わる用語が「アクセシビリティ」です。近づきやすさや利用しやすさを意味します。施設側から言えば、いつ、誰が来てでもできるだけのことをするホスピタリティと考えればいいと思っています。お客様は神様でなく人間です、というのは冗談で

すが、みなバラバラなことを考えて行動し、必要としていることもさまざまです。施設に求められる「合理的配慮」というのは、お客様のためにできるだけ頑張ることだと思っています。

美術館は客商売だと昔から自説を語ってきました。誇張した表現ですが、来てくれた全ての人が、小さな幸せを持って帰路についてほしいという願いです。ただ、全員が満足する「展覧会」は不可能です。むしろさまざまな感想や意見が出ること、正解のない場所が美術館で、だからこそ教育機関としての存在意義があるはずです。でもアクセシビリティは違います。全てのお客様に残念な気持ちを抱かせない、と考えれば「合理的配慮」

が見えてくるのではないのでしょうか。

視覚障がい者から頼まれた時に、最寄り駅まで迎えに行く劇場があるそうです。その人だけ特別扱いしている、という意見を言う人がいるかもしれません。が、「合理的配慮」は必要でなおかつ可能、と判断したらやらなければならないこと、と意識しなければなりません。なお、改正障害者差別解消法では、「合理的配慮」は行政だけでなく、民間事業者にも義務化されました。

では冒頭の問い合わせにどうすればよかったのでしょうか。今でもよくわかりません。わかるのは、事前に答えをすべて準備しておく

ことは不可能だということです。もちろん、

スタッフ全員が（文化施設のスタッフとは職員のほか、受付など、契約会社の社員なども含まれます）、基礎的な知識を備えている必要はあります。例えば、介助者ではなく当事者に話しかけること、視覚障がい者ならば発話者の場所がわかるように名乗ることなどです。

まずは、障がい者という先入観で判断しないことでしょうか。人によって特性もさまざまなので、当事者の望む方法で意思疎通をはかることが必要です。あとはホスピタリティがあればなんとかなる、と思っています。

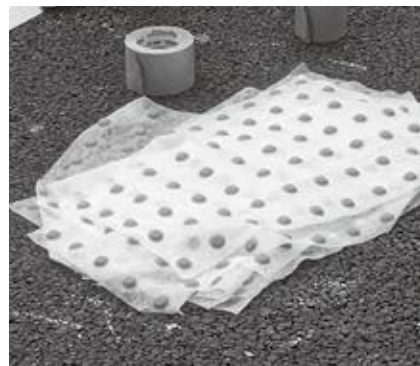
『式場隆三郎 【脳室反射鏡】展図録』 全国カタログ展 文部科学大臣賞受賞

式場隆三郎展の図録が、第63回全国カタログ展（主催・日本印刷産業連合会、産経新聞社）で文部科学大臣賞（第2席）ならびに図録部門金賞を頂きました。各界からの審査員の内、デザイン関係には浅葉克己・松永真・左合ひとみ・室賀清徳という、まぶしいお名前が並んでいます。選評の末尾に「まさに式場隆三郎というカオスをめぐる、カオスな一冊」と、当館のお知らせから引いて下さったのも面映ゆいことです。デザイナー西岡勉さんの「冥利に尽きる仕事」との言葉、日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社の進行担当・和田智之さんの「現場のみんなも面白がってますよ」という励ましが、温かく思い返されます。まだの方は是非。刺さる本です。

（学芸員 藤井 素彦）



当館ミュージアムショップにて販売中(2,800円(税込)、通販もあります)



貼られる前の点字ブロック だれかの命を救うかもしれません。

【参考】

・『「合理的配慮」を知っていますか?』内閣府
https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/pdf/gouteki_haiyo/print.pdf
・『劇場・音楽堂等アクセシビリティ・ガイドブック』公益社団法人全国公立文化施設協会、2020年
https://www.zenkoubun.jp/publication/pdf/atca/r2/r02_accessibility.pdf
・『障害のある方に対する情報補償配慮マニュアル【第2版】』山口県健康福祉部障害者支援課、2020年
<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/89064.pdf>

